

# 令和元年度 第1回 恵庭市総合教育会議録

- 1 日 時 令和元年5月10日（金）16:00～17:10
- 2 場 所 恵庭市立図書館（1階 会議室）
- 3 出席者 （市長）原田 裕、（教育長）穂積 邦彦、  
（教育長職務代理者）宮本 春美、（教育委員）土谷 秀樹、  
（教育委員）尾形 直子、（教育委員）福屋 栄人  
（オブザーバー）北越 俊二  
事務局  
（総務部長）横道 義孝、（教育部長）竹内 春実  
（教育部次長）中陳 法仁
- 4 傍聴者 1名
- 5 議題 議題（1）子どもたちと読書について  
①図書館本館見学  
②恵庭市における子どもたちの読書環境の現状  
③これからの課題  
（2）その他
- 6 議事録内容

## 1. 市長挨拶

令和となって、最初の総合教育会議の開催となる。教育委員の皆様におかれては日ごろから恵庭の教育行政にご協力いただき感謝申し上げます。総合教育会議は今回で通算7回目の開催となるが、その都度、教育の課題について忌憚のないご意見をいただくとともに意見交換をさせていただき、今後の教育行政に寄与しているところである。市長部局としても予算を含め、教育行政を進展させていきたいと考えている。

今回の議題である「子どもたちと読書」について、本市における図書館の活動は全国的にも評価が高く、多くの市内小中学校が文部科学省の「子ども読書活動優秀実践校」として表彰されることは、全国・全道的に見ても稀であり、大変誇らしく感じる。

今後も活動を進展させ、子どもの教育に寄与していかなければならないと思っており、本日は現状を伺い、様々な議論をしたいと考えている。

## 2. 教育長挨拶

恵庭市の教育について、恵庭市教育大綱に基づくとともに、恵庭市学校教育基本方針と恵庭市生涯学習基本計画に沿って、教育を進めており、市民の方々の参画や学校の主体的な取組により、落ち着いた教育が展開されているものと考えている。読書活動は学校教育、社会教育のいずれにおいても大きな柱であり、恵庭の大きな特色になっているところである。長年にわたる市民の協力によって創りあげられた恵庭の読書活動は、平成25年に、人とまちを育む読書条例の施行、その翌年に策定した読書活動推進計画により教育はもとよりまちづくりにも大きく貢献してきた。恵庭の読書は順調に来ているが、今後の更なる充実に向けて、

一旦振り返る時期に来ているかと思う。本日は学校の状況について話を伺うため、恵み野小学校の校長と学校司書に出席いただいた。様々な協議を通して、今後の読書活動の推進に繋がっていきたいと考えているので、ご協力願いたい。

### 3. 議 題

#### (1) 子どもたちと読書について

- ①図書館本館見学
- ②恵庭市における子どもたちの読書環境の現状
- ③これからの課題

#### ①図書館本館見学（図書館長より案内）

○平成29年度より指定管理者制度を導入。

- ・自習室に利用者の荷物を入れるための籠を設置。
- ・中学・高校生の利用者が増えており、ライトノベルなど興味を持ちそうな本のコーナーを設置。
- ・A Vコーナーを以前は受付で事務を行っていたが、利用者が自由に利用できる仕様に変更。
- ・館内の電気をLED電気に変更し、費用を縮減。
- ・市内3館で約68万冊の貸出のうち約34%が児童書であり、他市と比較し、多い。
- ・読み聞かせのボランティアが年間130回、読み聞かせの会を開催し、利用者は延べ千人以上となっている。読み聞かせを行う場所は声が聞き取りやすいよう吹き抜けとなっている。
- ・幼児向けの防音の部屋もあり、毎月装飾を変えるなど利用者に楽しんでもらえる工夫をしている。
- ・父親向けの読み聞かせの講座を開催。
- ・学習指導要領の変更に向けて、市内の方に依頼し、プログラミングの体験会を開催。

#### ②恵庭市における子どもたちの読書環境の現状

本市における読書活動の位置づけについて、総合教育会議にて策定した「教育大綱」に基づき、学校教育基本方針及び生涯学習基本計画、人とまちを育む読書条例によって策定した「読書活動推進計画」の3つの基本方針と38の施策に基づき推進している。

《市立図書館のあらまし》

昭和36年 公民館に図書室を設置

平成4年 恵庭市立図書館、島松分館開館

平成13年 「ブックスタート」事業実施

平成15年 市立図書館と学校図書館の一元化

平成16年 市内小学校8校全校に学校司書を配置（全道初）

平成18年 市内中学校5校全校に学校司書を配置（全道初）

平成25年 「恵庭市人とまちを育む読書条例」施行

記念事業「恵庭まちじゅう図書館」開始

平成29年 指定管理者制度導入

恵庭市における読書活動の特徴は「赤ちゃんから高齢者」まで生涯各期に応じた読書活動の推進と環境づくりである。乳幼児期はブックスタートとして絵本をプレゼントし、小・中学校期は市内全校に学校司書を配置し、学校図書館の充実及び環境整備を図っている。また高齢者には図書の宅配サービスなど、すべての市民が生涯にわたり、いつでもどこでも読書活動が行うことができるよう環境整備を進めている。

市立図書館の貸出冊数の推移として、平成3年度は27万冊であったが、平成30年度には60万冊を超える貸出しがあった。市民一人当たり貸出冊数は、4.87冊から平成30年度には9.84冊と2倍以上となった。これは平成29年に開設した恵庭分館（えにあす内）が要因と考えている。また、無断持ち出しなどによる「不明本」が当初800冊程度あり、ピーク時には千冊を超えたが、利用者のマナー向上により、最近では300冊までに減り、島松分館においては0冊であった。

学校における読書活動については、平成15年から市立図書館と学校図書館の蔵書全てを一元管理し、学校にしながら、図書館等の蔵書を検索し、貸出申込が可能となった。現在は市内高校2校ともオンライン化され、貸出が可能となった。

青少年・文化振興基金活用事業を活用し、「ものがたり定期便」として、司書がテーマで選んだ新刊30冊を市内各校に4週間を目途に巡回し、通常の本と同じ仕組みで借りることができる。

学校における読書活動の事例として、恵み野旭小学校では毎朝「朝の会」で10分間の朝読書が行われているほか、先生やボランティアによる読み聞かせが行われている。常駐している学校司書が新着本の紹介に工夫を凝らすほか、ボランティアとともにしおりの作成、図書委員による読書を推進するための企画などを行っている。

学校司書の連携を図るため、年2回司書教諭との合同研修会を開催するほか、月1回学校司書ミーティングを行い、情報交換などを行っている。

恵庭市における子どもたちの読書状況については、「全国学力・学習状況調査」の調査項目における「読書が好きな子どもの割合」において、「読書が好き」と答えた児童の割合及び図書館を利用する割合が全国・全道の小中学校の平均より高い状況になっている。

《平成30年度の学校図書館の年間の活用状況》

【貸出冊数】市内小学校（8校）：63.8冊／人、市内中学校（5校）：22.9冊／人

【配本状況】予約数：約1万7千冊、団体貸出：約1万4千冊

【廃棄図書及び新規図書】廃棄図書：約9千冊、新規図書：約5千冊

### ③これからの課題

2020年より学校における学習指導要領が変更になり、思考力・判断力・表現力の育成などの方向性が示されており、これからの学校においては主体的・対話的で深い学びの充実は求められている。

《文部科学省による「学校図書館ガイドライン」（一部抜粋）》

- ・学校図書館における読書センター及び学習センター、情報センターとしての機能の充実。
- ・蔵書の適切な更新・廃棄。
- ・可能な限り学校図書館を開館する。※恵庭市は8時～16時まで司書を配置。
- ・学校司書と司書教諭、教職員と連携し、学校図書館全体計画の策定、運営。

・司書教諭の職務遂行に係る体制づくり

読書に関する取組に、肯定的に答える児童・生徒の学力が高くなることは世間一般的にいわれているが、文部科学省が実施した平成29年度全国学力・学習状況調査の結果の分析から、規則的な生活を送り、本や新聞などに親しむ子どもは、親の年収や学歴が低くても、学力が高い傾向にあることが判明した。また仙台市教育委員会と東北大学が協同し、学力と生活習慣の研究では、「読書をまったくしない」と答えた子どもは、家庭学習や正しい睡眠時間をとっていても、読書を1時間する子どもに比較し、成績が良くないことが判明した。こうしたことから、子どもたちや保護者に、読書の有用性や望ましい生活習慣の重要性を広く周知し、今後もより一層の読書活動の充実を図っていく必要がある。

○恵み野小学校 谷口校長

恵庭には初めて赴任したが、各校に学校司書がいるのは大変すばらしい。学校司書がいることで、読書の習慣づけや授業で使用する資料本の紹介や取り寄せのほか、学習の場面以外にも悩んでいる児童に寄り添った本の紹介など、読書環境が整っていると感じている。本校では保護者や市民ボランティアと読み聞かせや学校図書館の飾りつけなども実施している。読み聞かせは低学年向けのように思われるかもしれないが高学年の児童も楽しんで聞いている。また、本校では小学校1年生と6年生の最初と最後に校長が自ら読み聞かせを実施している。本を通して児童だけでなく教員も豊かになると考えている。今後は、読書が好きではないと感じている児童に対して、家族ぐるみで読書を推進できるような体制を考えていきたい。

○恵み野小学校 佐藤学校司書

日々、先生や他校と連携し、子どもたちに1冊でも多くの本を繋げたいと考えている。担任の先生が本を薦めることで、子どもたちがその本に興味を持つなど、学校司書1人では読書推進に限界があるが、教員からの協力を得ながら推進している。また、校長が読み聞かせをするなど特別感を感じることで児童の心に残っていく。本校では読書以外にも先生が授業に本を活用することが根付いており、自身の活動に繋がっている。学校図書館にはいつも来る児童もいれば、まったく来ない児童もあり、読書をしない児童にどのように読書を推進していくか、保護者や教員、読書推進課と連携して進めていきたいと考えている。

【質疑・意見】

(A委員)

本を読むのが好きではない子どもが読み聞かせる側になった際に本を読むのが好きになったという話を聞く。子どもたちが動く側になると状況が変わるかもしれない。高校生になる本を読む機会が減るというが、子どものうちからどのようにフォローアップしていくか検討しなければならない。

(D委員)

現状、子どもたちが調べ学習をする際、学校図書館と市立図書館の蔵書で充足しているか。また、各図書館からの要望は吸い上げているのか。

⇒調べ学習は多岐に亘ると様々な本が必要となり、現状、市立図書館及び学校図書館全体の

やり取りでは足りるが、1校だけでは不足が生じる。また、学校の調べ学習は重なることもあり、学校同士で授業の進捗を調整するなどの必要がある。

蔵書については、青少年・文化振興基金活用事業を活用した「ものがたり定期便」により、1校だけではなく、市内全校に本が行き渡るようにしている。

(D委員)

現在、本の収容スペースはまだあるのか。

⇒市立図書館はいっぱいになりつつある。

(C委員)

家庭での読書が定着している子どもは成績がいいとの話があったが、現実的に宿題に忙殺され、本が読めない状況もある。今後は保護者と連携し、1日の中で読書をする習慣づけができるといい。

(B委員)

学習指導要領の変更により、プログラミングの授業の導入などITに傾いた教育方針になりつつある。我が家でも子どもが調べ物をする際、本ではなくインターネットを利用している。インターネットのほうが調べる時間も短く、情報量が多い。年齢が上がると本離れが進むが、今後子どもたちにどういった働きかけをしていくべきか検討していかなければならない。

⇒恵庭市における読書活動は紙媒体で推進しており、全国ではどのような取組がなされているか把握し、検討したい。学校での習慣が家庭でもリンクするような仕組みを学校でも考えていかなければならない。恵庭市の読書環境が整っているという現状に満足することなく、学校や家庭で読書のすばらしさを伝えていかなければならない。

(A委員)

子どもは、大人からだけではなく子ども同士からも影響を強く受ける。読書が好きな子に情報発信する側に回ってもらい、子どもからの読書推進の環境を構築するのも一つの手法と考える。

(市長)

学校司書と一般の教員との繋がりはどういったものか。

⇒職員室に席を設けており、日常的に情報交換などを行っている。本のことだけではなく、図書館に来た児童で気になることがあれば適宜相談などを行っている。

(市長)

教員と学校司書が連携を密に取ることは児童にとっても、大事である。市立図書館には本が好きな人が来るが、学校図書館には本を読まない子が、本を読む楽しさを知り、ゆくゆくは市立図書館に行くようになってもらいたい。市内の小学生が年間一人当たり約66冊も読んでいるのは全国的に見てもすばらしく、今後は本を読まない子にどう目を向けさせ

ていくか学校や家庭、読書推進課が連携し、推進していただきたい。

(2) その他

次回の開催は、詳細が決まり次第改めて連絡することとしたい。

以上